

北極を中心
世界を見る



図 『新詳高等地図』 p. 5~6 (①アジア・ヨーロッパ・北アメリカより (一部加工))

MAP 正距方位図法で見る北極の周辺

グリーンランドと日本は意外に近い。この 図 を見ての私の第一印象だ。世界全図によく用いられるメルカトル図法では、世界最大のこの島は右上または左上に巨大に描かれる。オーストラリア大陸の何倍にも見えるが、実際にはその3分の1に満たない。この図法のクセは知っているはずなのに、子どものころから見慣れたメルカトル図法の「枠組み」を頭の中から払拭するのはなかなか難しいようで、東京からグリーンランド最北端まで(約6,750km)より、インド最南端のコモリン岬(約7,000km)のほうが遠いという事実になかなか納得できないのはその証拠だろう。

北極海を隔てて向き合っているカナダとロシアも、こうやって見ると実に近い。カナダ最北端のエルズミア島北端からロシア最北端のセーヴェルナヤゼムリャ北端の間は約1,730kmだから、釧路~鹿児島間より少し短い程度である。そういえば、30年ほど前にカナダの地形図を同国測量局に注文して購入した。このエルズミア島最北端に近い25万分の1地形図「マクリントック入江」という図である。

この図の北端に記された緯線は北緯83度15分というまさに極北で、図の欄外には小さな字で「1986年の偏角は西偏95度35分」と恐るべきことが印刷されていた。「偏角」は真北に対する磁北の偏りを意味し、日本ではおおむね5度から10度の間に収まっている。これが95度なのだから、簡単にいえば「磁北は西」ということだ。なお、上の 図 で示された北磁極は2021年のものだが、北磁極は20世紀の後半以降、北西へ移動を続けているので、1986年当時のそれはもっと「真西」に近かったと考えられる。

また、この辺りは北極点で収束する手前の経線がひ

しめいているので、経度1度の間隔が狭く、「マクリントック入江」図の経度1度の間隔はわずか4cm(10km)ほどしかない。東京あたりの経度1度の間隔は90kmほどなので当然ながら大違いだ。日本の1:25,000地形図の切り方である南北5分、東西7分30秒なら東京付近の図が37cm×45cm(隣図との重複部分を除く)となると、この極北の地では横幅が約5cmの「短冊」状になってしまう。地球が球体であることを再認識できる。

MAP 地図に刻まれた温暖化の“影響？”

さて、北極点中心の上の 図 に描かれた赤い破線は「北極海を航行する航路の例」で、近傍には「北極海のおもな寄港地」としてペヴェク、サベッタ、ムルマンスクの3つが示されている。最近の北極海は地球温暖化の影響とされる海水の減少がしばしば話題になるが、この海域が結氷しない期間には船舶の航行が可能だ。増加が著しいアジア~ヨーロッパ間の貨物輸送をこちら経由にすれば従来のスエズ運河経由に比べて大幅な近道なので、最近にわかに注目されている。

「地理院地図」でその距離をざっと測ってみると、東京からスエズ運河経由でフランスのマルセイユまで約17,800kmであるのに対して、東京から北極海航路でオランダのロッテルダムまでは約12,800kmと5,000kmも短い。所要時間は5~6日(時速20ノットの場合)も短縮され、燃料もそれだけ節約になる。

図 には「夏に長期間海水がある範囲」として北極点中心の青い囲みが描かれているが、2019年9月にはその範囲が紫色の線まで狭まった。これが「温暖化のたまもの」だとしたら素直には喜べないけれど。

*文中の距離はすべて「地理院地図」による計測。図の正距方位図法では、中心(ここでは北極点)を通る直線上にある地点間以外の距離は正しく計測できない。

いまお・けいすけ / 1959年生まれ。

出版社勤務を経て地図・地名分野の執筆を始める。著書に『地図帳の深読み』シリーズ(帝國書院)など多数。日本地図センター客員研究員。日本地図学会「地図と地名」専門部会主査。

